

理科専修学部学生における「学修キャリアノート」の利用実態

Actual Usage of “Gakushu-career-note” among Undergraduates Majoring Science

寺 島 幸 生

TERASHIMA Yukio

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 36 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

理科専修学部学生における「学修キャリアノート」の利用実態

Actual Usage of “Gakushu-career-note” among Undergraduates Majoring Science

寺島 幸生

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学
TERASHIMA Yukio
Naruto University of Education
748 Nakashima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：鳴門教育大学学校教育学部では、学生自身で自己の学修履歴を記録・省察する学びのポートフォリオ教材「学修キャリアノート」を導入している。本研究では、「学修キャリアノート」の今後の在り方を検討するための基礎資料を得ることを目的に、理科専修の学部学生を対象に、同ノートの利用状況についてアンケート調査を試行した。結果として、被検学生の多くは、「学修キャリアノート」を記録および見返す頻度が年1回以下で、このノートの必要性や有用性を実感していないことが明らかとなった。また、4年次生は2年次生に比べて、同ノートに対しより否定的である傾向が見られた。今回の調査結果から、「学修キャリアノート」本来の目的と学生の利用実態の間には、大きな隔たりがある可能性が示唆された。今後は、「学修キャリアノート」を学生にとってより使いやすく実効性のある教材へと改善していくことが必要である。

キーワード：学修キャリアノート、学びのポートフォリオ、自己省察、教員養成

Abstract： The Faculty of Education, Naruto University of Education has introduced a portfolio for learning, “Gakushu-career-note”, for undergraduates to record and reflect their learning careers. In this study, we conducted a questionnaire survey on the actual usage of the portfolio among undergraduates majoring science to obtain basic information for further improvement of the material. As a result, we found that many of the students record and review the portfolio once a year or less, and they do not recognize its necessity and usefulness. In addition, the 4th-grade students tend to be more negative in using the portfolio compared to the 2nd-grade ones. The results of this survey suggest that there may be a large gap between the original purpose of the portfolio and the actual usage among students. In the future, it is necessary to improve the present “Gakushu-career-note” to be easier and more effective for students.

Keywords： Gakushu-career-note, portfolio for learning, self-reflection, teacher training

I. 研究の背景と目的

中央教育審議会（2006）による「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」以降、「学び続ける教員」の養成が強く求められている。具体的施策の1つとして、教員免許取得に必修の教職に関する科目「教職実践演習」が新設された。この科目は、他の授業や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質・能力が、教員として最小限必要な資質・能力として有機的に統合され、形成されたかについて確認するものであり、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられている。

鳴門教育大学学校教育学部においても、2013年度から「教職実践演習」を開講し、2010年度に先行導入し

た「学修キャリアノート」を併用して、学び続ける教員を養成しようとしてきた。「学修キャリアノート」は、学生自身が自己の学修履歴を記録する学びのポートフォリオ教材であり、後述の資質・能力が身についたかを自己省察することを意図した構成となっている。

同大学同学部では、教員として必要な基礎的な資質や能力を養うとともに、広い視野に立って教育活動を行い、地域の教育課題に応え、教育の改善に役立つことのできる教員の養成を行うことを目標に掲げている。修学成果の評価と認定に係る基準として、学士課程における学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定め、その中で、以下(1)～(5)の資質・能力を明記している。

(1) 教育者としての人間性

使命感・倫理観・教育的愛情・探究心・教養からなる、教職の基盤となる人間性を有している。

(2) 協働力

対人関係能力・協調性・社会性を有し、教員としての職務を自覚し、多様な価値観が競合する社会集団の中で、リーダーシップを発揮しながら良好な人間関係を築くためのコミュニケーションを遂行できる。

(3) 子ども支援力・指導力

公正な判断力と態度を基盤にした個人指導力・集団指導力を有し、子どもの実態を把握した円滑な支援・指導ができる。

(4) 保育・授業実践力

深遠な学問的知識や探究方法の理解に基づき、教科・領域内容の理解力と、保育・授業の構想・展開・評価の能力を有し、適切な学習計画・指導・評価を実践できる。

(5) 省察力

変化する社会状況の中で、自己の教育実践を絶えず反省・評価し、改善していくことができる。

上記の資質・能力を学生に自己省察させる「学修キャリアノート」の教育効果については、同大学の教育・研究評価結果報告書（鳴門教育大学教育・研究評価室、2015）において、以下のように総合的に評価されてきた。

観点 養成しようとする人材像に応じた効果的な教育内容・方法の工夫

（観点に係る状況）【教員として必要とされる5つの資質・能力】を観点として、1年次から4年次までの科目履修、教育実習、課外活動を記述した「学修キャリアノート」を通して、学生自らが教員としての資質・能力を評価し、補完・向上させる科目となっている。

（水準）期待される水準にある

（判断理由）（前略）「学修キャリアノート」は、自らの学習成果を振り返るポートフォリオとしての役割は大きい。

観点 単位の実質化と評価方法の工夫

（観点に係る状況）教職実践演習では学修キャリアノートに授業省察記録を記入させ、気づき、成果、課題等を見いだすよう試みている。教員は定期的にそれをチェックし、学生の理解と指導を行っている。

（水準）期待される水準に照らして、十分には応えられていない

（判断理由）（前略）教職実践演習では、学修キャリアノートを利用し、課題を見出し、改善につなげる工夫がなされていることは評価できる。

一方、学生がどのような意識で、どれぐらいの頻度で

「学修キャリアノート」を記録して自己省察に活用しているのか、さらにその有用性をどう感じているのかを具体的に調査した事例は、著者が調べた範囲では確認できていない。記録および省察の中身は、学生によって個人差があり、また、大学教員の指導・助言も点検する各コース・教員によって、大きく異なることが予想される。

本研究では、「学修キャリアノート」の今後の在り方を検討するための基礎資料を得ることを目的として、同大学学部理科教育コース学生を対象に、同ノートの利用状況に関するアンケート調査を試行した。以下では、調査結果の概要や学生からの意見等を報告しながら、「学修キャリアノート」の今後の方向性を考えるための情報を提供する。

II. 学修キャリアノートの概要

「学修キャリアノート」では、教師として身につけておくべき資質・能力（＝教師力）として、図1に示すように、(1)教育者としての人間性、(2)協働力、(3)子ども支援力・指導力、(4)保育・授業実践力、(5)省察力の全5領域計16項目を設定し、その評価基準を明記している。同ノートには、授業省察記録欄、教員としての資質・能

別表. 教員として身につけておくべき資質・能力とその内容

教員としての資質・能力(領域)	教員としての資質・能力(項目)	スタンダード(評価基準)
教育者としての人間性	使命感	教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする意識を持って、指導に当たることができる。
	倫理観	高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職務を果たすことができる。
	教育的愛情	子どもの成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動することができる。
	探究心	教育だけでなく様々な分野や事象に対して広く関心を持ち、自らの力量向上に向け、日々探究し続けることができる。
	教養	社会人として生連にわたって基盤となる幅広い教養とスキルを身につける。
協働力	対人関係能力	教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。
	協調性	組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務をリーダーシップを発揮しながら遂行することができる。
	社会性	保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築くことができる。
子ども支援力・指導力	基本的態度	子どもに対して公正かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができる。
	個人指導力	子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行うことができる。
	集団指導力	子どもと間に信頼関係を築き、学級集団を把握して、子どもが互いに高め合える、規律ある学級経営を行うことができる。
保育・授業実践力	教科内容・保育内容の理解	教科等の背景にある専門諸科学・芸術に関する豊かな知識と探究方法を理解し、教科内容という観点からその知識や方法を解釈し、授業づくりで活かすことができる。
	構想力	教科書や学習指導要領の内容の理解を基盤として、適切な教育目標を成定し、それを達成する授業を構想することができる。
	展開力	単元計画(単元(授業)計画の作成/学習指導案の作成/学習評価計画の作成) 基礎的・基本的な授業態度(音声・表情・所作等) 教授活動の構成と展開(個や集団への配慮/説明/助言・指示/板書/教材・教具の開発) 話し方、書き方、表情など基本的な表現力を基盤にして、様々な教育技術を駆使して、教育目標を達成することができる。
	評価力	子どもの反応や学習の定着状況を考慮又は想定して、省察的に授業計画や学習形態等を検討し改善できる。
	省察力	変化する学校現場の状況の中で、自己の教育実践を絶えず反省・評価し、改善していくことができる。

図1 「学修キャリアノート」記載の教師として身につけておくべき資質・能力とその内容（鳴門教育大学、2020）

力の形成に関する自己省察、ボランティア状況等についての記録用紙が綴じられている。学生は授業省察記録およびボランティア状況について年2回(前期分は夏休み、後期分は春休み)、資質・能力の形成に関する自己省察を年1～2回、それぞれ記録することが求められる。1年次前期～2年次前期分は各コースのクラス担当教員に、2年次後期分～3年次後期分は卒業研究指導教員に、4年次前後期分は教職実践演習担当教員にそれぞれ提出して点検を受けることとなっている。同ノートは「教職実践演習」に加えて、「主勉教育実習事前事後指導」でも、学修記録や自己省察の材料として利用されている。

III. 調査方法

2017年度から2020年度にかけて、鳴門教育大学学校教育学部理科教育コース2、4年次生を対象に、「学修キャリアノート」の利用状況や有用感等を問う無記名の質問紙調査を以下の要領で実施した。当調査は、同コース学生の必修科目「中等理科教育論I」(2年次生対象)および「教職実践演習」(4年次生対象)の各授業の中で実施し、4年間で2年次生計35名、4年次生計42名から回答を得た。

質問紙には、「学修キャリアノート」を記録・省察する頻度、同ノートに関する必要性や有用感、学生からの具体的意見等を調査する目的から、以下の質問を設定した。

記録頻度に関して、『どれぐらいの頻度で「学修キャリアノート」を記入しましたか?』に対して、「各授業後に毎回」、「前後期の学期末ごと」、「年度末(3月)にまとめて」、「ほとんど記入しない」の選択肢から1つを選んで回答する質問を設定した。

省察頻度に関して、『どれぐらいの頻度で「学修キャリアノート」を見返すことができましたか?』に対して、「ほぼ毎月以上」、「年5～10回程度」、「年2～4回程度」、「年1回程度」、「全くない」から1つを選ぶ質問を設定した。

必要性に関して、『「学修キャリアノート」は、教職に就くために必要かつ有用な知識や技能を身につけ、教師として必要な資質・能力を養う上で必要だと思いますか?』に対して、「とてもそう思う」、「どちらかと言えばそう思う」、「どちらかと言えばそう思わない」、「全くそう思わない」から1つを選ぶ質問を設定した。

有用感に関して、『「学修キャリアノート」に設定されている1)授業省察、2)教員としての資質・能力チェックリスト、3)担当教員のコメントや助言の各記入欄が、自己省察においてどれぐらい役に立ちますか?』に対して、それぞれ「とても役に立つ」、「どちらかと言えば役に立つ」、「どちらかと言えば役に立たない」、「全く役に

立たない」から1つを選ぶ質問を設けた。

最後に、『「学修キャリアノート」の今後の在り方(改善すべき点、より効果的な利用法など)について自由に書いてください』の自由記述式の質問を設定した。全員が回答を終えるまでに要した時間は5～10分程度であった。

IV. 調査結果

上述のアンケート調査結果の概要を図2～5に示す。なお、無回答、複数選択、判読不明な記述などは無効として集計に含めていないため、質問項目によって有効回答数が若干異なっている。以下では、各質問への回答状況を概観しながら、被検学生の「学修キャリアノート」の利用実態について整理する。

1. 学生の記録頻度

図2は学生が「学修キャリアノート」を記録する頻度の状況を示している。2、4年次生で全体的傾向は類似しており、両学年とも「前後期の学期末ごと」、「年度末にまとめて」、「ほとんど記入しない」がそれぞれ3割前後を占め、「各授業後に毎回」記録する学生はいなかった。「年度末にまとめて」と「ほとんど記入しない」を合わせて、記入頻度が年1回以下の学生は、各学年ともに7割近くに達している。学生は少なくとも前・後期末の年2回記入し、担当教員の点検を受けることになっている。しかし、被検学生の約7割は、各年1回以下の記入頻度に留まっている実態が明らかとなった。

2. 学生の省察頻度

図3は、学生が「学修キャリアノート」を見返す頻度の状況を示している。記録頻度と同様に、全体的傾向は2、4年次生で類似している。両学年共通して、見返すことが「全くない」と回答した学生が約7割と圧倒的に多く、「年1回程度」の学生が2割前後と続いている。「全

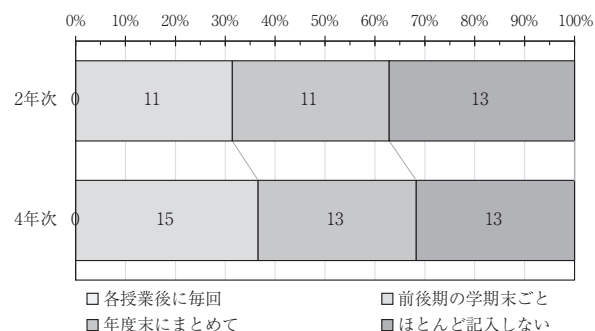


図2 学生が学修キャリアノートを記録する頻度

(数値は『どれぐらいの頻度で「学修キャリアノート」を記入しましたか?』に対する各選択肢の回答人数)

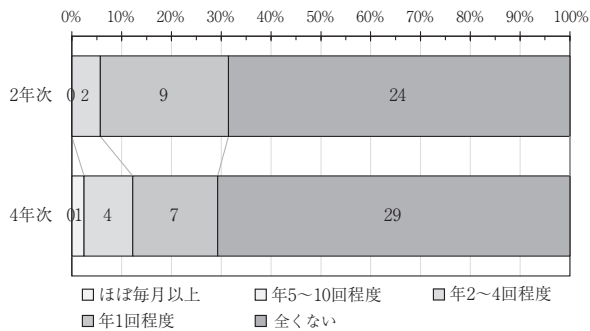


図3 学生が学修キャリアノートを見返す頻度

(数値は『どれぐらいの頻度で「学修キャリアノート」を見返しましたか?』に対する各選択肢の回答人数)

くない」と「年1回程度」を合わせた見返す頻度が年1回以下の学生は、両学年ともに約9割に達している。一方、「ほぼ毎月以上」見返している学生はおらず、年間複数回見返す学生は、両学年ともに全体の約1割に留まっている。記録頻度が年1回以下の学生が約7割である一方、見返す頻度が年1回以下の学生は9割とより多いことから、書いても振り返っていない学生が多いと予想される。

3. 学生にとっての「学修キャリアノート」の必要性

図4は、教員としての資質・能力形成における学修キャリアノートの必要性についての学生の回答状況を示している。2年次生では、『学修キャリアノート』は、(中略)教師として必要な資質・能力を養う上で必要だと思いますか?』に対し、「どちらかと言えばそう思わない」、「全くそう思わない」を合わせた否定的回答の割合が約7割に達し、「とてもそう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合わせた肯定的回答割合を大きく上回った。4年次生では、否定的回答の割合が8割を超え、2年次生と比べて、「学修キャリアノート」の必要性を感じていない学生の割合がより多いことが明らかとなった。

4. 各設定項目に対する有用感

図5は、「学修キャリアノート」の主な設定項目に対する学生の有用感の概況を示している。1) 授業省察、2) 教員としての資質・能力チェックリストに対して、2年次生では、「どちらかと言えば役に立たない」、「全く役に立たない」を合わせた否定的回答が半数を超えるが、「とても役に立つ」、「どちらかと言えば役に立つ」を合わせた肯定的回答も半数近く、両者の割合はほぼ拮抗している。一方、4年次生は、1) 2) の両項目ともに、否定的回答の割合が8割前後に達しており、2年次生よりも有用性を実感していないと言える。一方、3) 担当教員のコメントや助言に対して、2年次生では、約6割が肯定的に回答し、否定的回答を上回っている。しかし、4年次生では、否定的回答の割合が2年次生に比

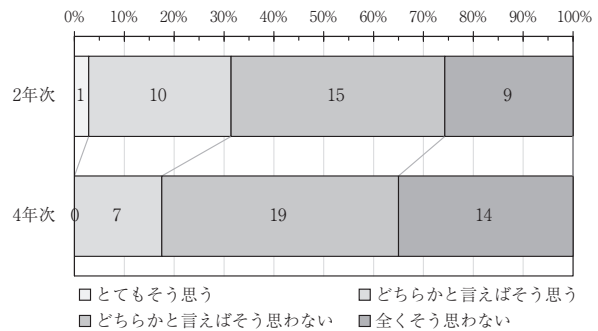


図4 教員としての資質・能力形成における学修キャリアノートの必要性

(数値は『学修キャリアノート』は、教職に就くために必要かつ有用な知識や技能を身につけ、教師として必要な資質・能力を養う上で必要だと思いますか?』に対する各選択肢の回答人数)

べて多く、肯定的、否定的各回答が同数である。以上の結果から、4年次生は2年次生に比べて、教員のフィードバックを含め、学修キャリアノートの内容に有用感を感じていないと言える。

5. 学生からの意見・提案等

『学修キャリアノート』の今後の在り方(改善すべき点、より効果的な利用法など)について自由に書いてください』の自由記述式の質問に対する学生の回答(原文)を表1に示す。本稿では、学生のありのままの意見を予

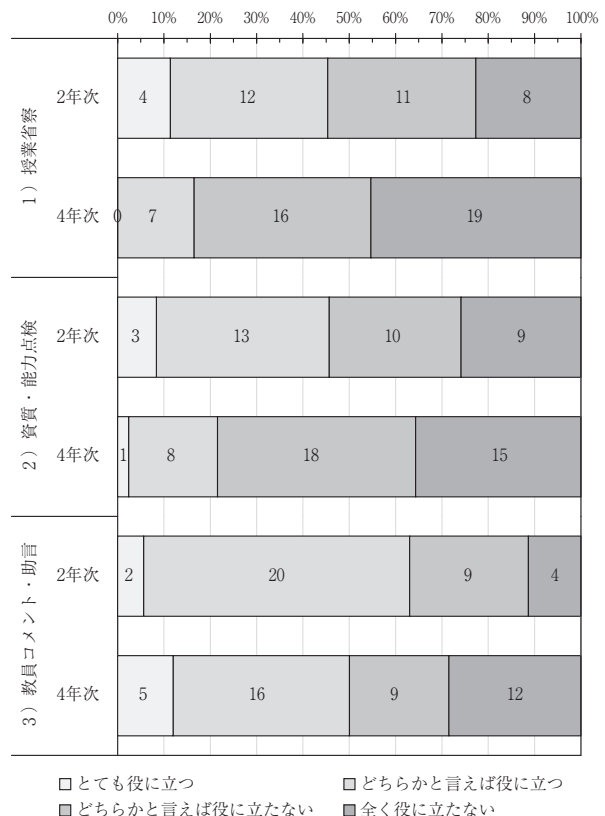


図5 学生の「学修キャリアノート」各項目に対する有用感 (数値は『学修キャリアノート』1)~3)の各項目は、あなたの自己省察にどれぐらい役に立ちますか?』に対する各選択肢の回答人数)

断なく読者に提供する目的から、記述内容に対する詳細な分析や解釈は差し控え、全体的な傾向だけを以下に述べる。個々の学生の回答は多様だが、「学修キャリアノート」の意義を見出しにくいこと、記録項目の多さ、記録形態（手書き）の煩雑さ、運用面での使いにくさに関する指摘、教育効果を疑問視する意見などが多い。また、それらの問題点を主な理由に、廃止や改善を求める提案・要望が多い。特に、4年次生は4年間の使用経験を踏まえ、問題点や改善に向けての意見・提案を、2年次生よりも具体的に示している。

V. まとめと今後の課題・展望

本研究では、「学修キャリアノート」の今後の在り方を検討するための基礎資料を得ることを目的として、学生の同ノートの利用状況に関するアンケート調査を試行した。結果として、被検学生の多くは、同ノートを記録および見返す頻度が各年1回以下であり、授業省察、教員としての資質・能力チェックリスト、担当教員のコメント・助言に対して有用感を感じず、「学修キャリアノート」の必要性を実感していないという実態が明らかとなった。また、4年次生は2年次生に比べて、現行の「学修キャリアノート」に対してより否定的であり、大学での学修を通して「学修キャリアノート」が抱える諸課題をより強く実感しているという傾向が示唆された。一方、

同ノート内には、本来の目的として、『この「学修キャリアノート」をとおした取り組みは、自己の学修の成果や課題を確認する手助けになります。そして教職に就くために必要かつ有用な知識や技能を身に付けるのに役立ちます。自己を省察し、学びを深めるために、「学修キャリアノート」を活用しましょう。』と明記されている。今回の調査結果から、本来の目的と学生の利用実態の間には、大きなギャップがある可能性が示唆された。本研究によって、「学修キャリアノート」の今後の在り方を検討する上で重要な情報が得られたと言える。

今後は、他の学年・コースにも対象を拡げ、学生の「学修キャリアノート」の利用実態を、より幅広くかつ詳細に調査することが求められる。調査結果を根拠として、学習者の目線から「学修キャリアノート」の内容や運用を見直し、より実効性のある「学修キャリアノート」の在り方を模索していくことが必要である。学生が真に自らの学びを省察し学び続ける教師となれるように、現行ノートの修正や廃止、新教材の開発などを含めた幅広い選択肢を予断なく検討することも重要である。

引用文献

- 中央教育審議会（2006）、「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」。
- 鳴門教育大学（学士課程）ディプロマ・ポリシー、

表1 「学修キャリアノート」に対する学生の意見・提案等

2年次生	4年次生
<ul style="list-style-type: none"> ● 必要ない。 ● なくした方がよいと思う。 ● 担当教員のコメントや助言または面談は、自分にとってとても意味のあるものです。 ● 電子媒体を用いることができる様式にする。 ● もっと具体的な活用方法を示してほしい。学科ごとにキャリアノートの取組の差が大きいに感じる。 ● 最終の授業の時に、キャリアノート記入時間を作ればもっと活用する人が増えるのではないかと思います。 ● 教務側で提出締切日に関する認識の統一ができていなかったために、後期の始まるときに非常に困りました。半期ごとに学科への提出義務があるという情報が問い合わせでも入ってこなかった。 ● NICES と何かわからない。意義がわからない。堅いイメージがあるからラフに使えるシステムの方が嬉しい（メール送信システム）。教授に提出するのが大変。 ● キャリアノートを書いても見直したところで同じ講義をもう一度受けられるわけではないので、書いても意味がないと思う。単位を取得した時点で、その授業を理解できているということになるので、それをわざわざ文字に起こして見直し、他者に見せ指導・助言を受けるのはあまりにも無駄な作業であり時間だと思ふ。総じてキャリアノートは書く意味を見出せない。なくすべきだ。 ● 「学修キャリアノート」が続くなら、必要な回の授業の後5～10分を利用して、教員が当日の（授業）内容に基づいた内容でデザインしたノートを授業の一部として記入した方が印象深く、負担にならないと思う。毎回の記入は教員として大変かもしれないのでシラバスを参考にして大事な学習をピックアップして、その数回だけ記入してもよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ● パソコンで記入できるようになると嬉しい ● 使っている人などほとんどいないと思うのでなくせばいいと思う。 ● 授業名をあらかじめ記入しておいてほしいということがあった。 ● なくした方がよい。 ● 4年間ちゃんと書きましたが、よくわからなかったです。 ● ネットワーク上で処理できるようにしてほしい。 ● 電子媒体を使えないので、とっても良い手の運動をすることができました。 ● 教師にならない人にまったく意味がない。書く内容が固定されすぎていて、自由度が皆無。 ● 3年次と4年次の振り返りは、（主免・副免）実習の振り返りと重複する部分があったりする。 ● 学修キャリアノートの目的や意味を考え直していく必要があります。廃止してもいいかと思ひます。 ● 授業ごとの記入と単位の授与を絡めることでキャリアノートの利用頻度や活用度合いも変わってくると思います。 ● キャリアノート of 学年の振り返り欄は項目が多すぎてちがいがわからないものがあつた。 ● 受けた授業のシラバスのコピーを挟むところがあるといいと思う。 ● 各授業の時にアンケートと一緒に教員側からルーズリーフ等で配布しコメントをもらって最後にファイルに閉じるというようなやり方がいいと思う。授業をしてくれた先生に考え方を知ってもらわないと意味がないと思ひます。 ● 評価のポイントが示されているという点では良いかもしれないが、ただ作業として記入してただけだった。実習後に同じような振り返りをしたのでキャリアノートを記入する必要はないのではないかと思ひます。 ● NICES をするならキャリアノートは必要ないと思ひます。 ● 各講義の振り返りは確かに重要だったが、内容を書けばいいのか、学んだことを書けばいいのか不明瞭だった。また学んだことは講義によっては書き表しにくいものもあり、どうかなと思ひます。何より最後の部分は絶対にいらぬし、日常から得たものを書くにしても多すぎる。ただ長い文を書かせるだけの無駄な作業を求められている気がする。実習録と重複する内容を書かなくてもいいのではないだろうか。 ● 教員の確認において、コメント欄が一所にまとめられているため、面倒な教員はろくに内容も確認せずに記入することになります。また、一人の教員にしか確認させないことも相まり、ノートの記入事項が学生の自己完結で終わってしまうフシがあると思ひました。ノートをより有効活用する上で、教師コメント記入欄の分散および複数教員によるチェック体制があると良いなと思ひました。 ● 強制的に以前の授業を思い出させる作業をさせられるので、多少は役に立つと思ひます。 ● 廃止してもよいと思ひます。現状のままでは何も意味がない。

<http://www.naruto-u.ac.jp/information/05/007.html> (2021年8月確認).

鳴門教育大学(2020),「令和2年度入学生用 学修キャリアノート」, p.4.

鳴門教育大学教育・研究評価室(2015),「平成26年度教育・研究評価報告書」, pp.6-9.